

昭和51（1976）年1月から常勤医師として1年3カ月、昔の小海診療所に勤務しました。赴任時の強烈な印象は、臼田よりさらに厳しい寒さでした。2階建ての診療所の高い軒下から巨大な氷柱が凶器のように垂れ下がっているのを見て、思わず背筋を寒くしたものです。卒後5年目の外科医として先輩の内科医師（坂間晃先生）とともに診療に当たったのですが、本院の内科医師の不足（総勢8名）により、数カ月後には一人勤務を余儀なくされました。午前中の外来は内科を中心に、外科、整形外科、皮膚科となんでも屋。午後は往診と手術に明け暮れ、その合間に12床の病棟回診をこなしました。まだ当時は診療所でも手術をやっていた時代で、ベテラン看護婦さんを助手に、アッペ（虫垂炎）、ヘモ（痔）、ヘルニアはもちろん、皮膚移植など、本院での経験と参考



JR小海駅舎に併設移転される前の小海診療所

書や手術書を頼りにできることは何でもやったものです。全身麻酔による手術も本院の応援を仰いで行いました。全責任を負った緊張感と充実感の中での診療経験は、その後の医師としての生き方に大きな自信と勇気を与えてくれたと思っています。

診療所の10名あまりの職員で、本院での病院祭、院内合唱コンクールやバレーボール大会などのイベントにも、チームとして積極的に参加したことが懐かしく思い出されます。

それから半世紀近い歳月が流れ、この間、さまざまな医療機関の診療手伝いをしてきました。いずれも一定期間、定期的に通ったものです。病院としては軽井沢、金沢、鹿教湯、依田窪、川西日赤などに、診療所としては浅科村、北相木村、川上村の診療所に通いました。



南相木村診療所

そして、この3月をもって週1回、3年間の南相木村診療所勤務を終えることになりました。この1年間は午前中南相木、午後は北相木診療所と掛け持ちで診療を行い、昼休みに南相木村の温泉施設“滝見の湯”で一風呂浴び、名物のソバを味わう、至福の時間を過ごしました。診療所スタッフのあたたかさとともに、名残が尽きません。

この半世紀、南佐久郡南部の医療体制は大きく変化しました。現在の小海分院をサテライトとした医療ネットワークの充実ぶりは、まさに隔世の感があります。佐久病院が永年にわたり取り組んできた地域医療の実践モデルとして、今後も佐久病院グループ全体および地元行政、住民との密接な連携のもとに、よりよい医療システムの構築と豊かな地域づくりへの貢献を切に望むところです。



筆者（南相木村診療所の診察室にて）